

ロベルト・ボラーニヨ著・野谷文昭訳 『チリ夜想曲』

白水社、二〇一七年

伊藤 達也



『チリ夜想曲』は二〇〇〇年にスペインで出版されて間もない、二〇〇二年五月に『はるかな星』と同時に仏訳され、ロベルト・ボラーニヨの国際的評価を決定付けた中編小説である。日本では本作をもって白水社のボラーニヨ・コレクションが完結するが、長く待たされただけのことはあり、翻訳・解説共に最良の仕事がなされている。五十歳での早すぎる死がなければノーベル文学賞は確実であったと言われるこのチリ人作家を初めて知る読者にも自信をもって推薦できる。

読者は、冒頭のエピソード「鬘をお取りなさい」からボラーニヨの世界に投げ込まれ、改行なしで百四十頁続く第一段落の目くるめくイメーজの奔流に飲み込まれたまま、第二段落（わずか一行という圧倒的不均衡さ！）に到って、荒涼とした世界に置き去りにされることになる。しかしそれが心地よいカタストロフィを伴うのは、目の前にまさに「鬘」を取ることで出現した裸の真実が可視化されているからである。

物語は、自らの遠からぬ死を意識したカトリックの組織オプス・デイの神父で、チリの批評家であると同時にそれほど成功しなかった詩人、セバステイアン・ウルティア・ラクローワ（モデルはチリに実在する保守系文芸評論家）が自らの人生を振り返る一夜の独白という形を取る。十三歳で神学校に入学後、文学を志し、大物文芸評論家フェアウエル（チリに実在するアローネことエルナン・ディアス・アリエッタがモデル）と出会い、彼の文学サークル（実名

でネルーダが登場する）にデビューする。その後、教団の招きで教会の老朽化（鳩の糞害）対策のため一年間ヨーロッパ視察に出かけ、帰国後アジェンデ政権のクーデターによる転覆に遭遇、ピノチエト將軍とその幹部たちにマルクス主義を講義する仕事に従事する。女性作家カナレスのサロンへ出入りするうちに、そのアメリカ人夫が地下室で行っていた反体制派拷問の噂が耳に入り、後にその後日談が語られる。その間文学はチリの現実に対して徹底して無力であり、批評家は、沈黙をもって独裁者に手を貸すことになってしまふ。

所々に謎が用意され、読者を飽きさせない。語り手の神父は冒頭で落ち着いた生活が破られたのは「あの老いた若者のせいだ」と断言するが、この「老いた若者」は物語中に現れては消え、最後まで実在の人物なのかさえ明らかとされない。読者はその正体を、語り手のアルター・エゴ、青年期の虚栄心が生んだ幻などと推理しながら読みすすめることになる。地下室での拷問の後日談としてカナリスと再会した帰途でつぶやかれる「チリではこうやって文学が作られる、西洋の偉大な文学はこうやって作られる。」も謎である。これは保守派による前衛の容認、右派と左派の妥協的結合を意味するのだろうか？ さらに最大の謎は最後の一行「そのあとには、糞の嵐が始まるのだ。」だろう。エピソードのように語られたヨーロッパでの教会の糞害、その原因の鳩とその駆除のための鷹という関係が、雲散霧消の作家たちと眼光鋭い批評家との関係にも見えて来る。だとすると「糞」とはメディアを存続させるためだけに人畜無害な作家たちが量産する凡庸な作品群の謂いだろうか？

これらの謎に宙づりにされたまま、我々に出来ることは、本作と他の既訳作品を読み返すこと、そして仏語や英語には翻訳されながら、まだ邦訳のない作品『スケートリンク』、『護符』、『アントワーブ』、『悪の秘密（未完）』、らびに二〇一七年にスペインで刊行された未発表作『カウボーイたちの墓』、映画化された短編『孤児の物語』、また詩集やインタビュー集が一日も早く日本語で読めるよう訴え続けていくことだろう。ボラーニヨ作品は二十一世紀の読者のために書かれている。